

皮心伝心

リセット

子どもの頃は、親の転勤に伴って3, 4年おきに転校していました。正直、転校は嫌いではなく、逆に期待していたように思います。

いつも年度の区切りでの転校だったので、明日から新学年が始まる日の夕方に親と一緒に家から学校に向かいました。ここを右にまがるんだよ、ここの横断歩道を渡るようにしよう、などと確認しながら歩くのは、知らない土地を進む一種の冒険のようでした。春の夕暮れの中、学校前の信号が青になるのを待ちながらこれからどんな学校生活が始まるんだろうとわくわくしていました。

転校は、リセットのようなものです。クラスの同級生は今までの私のことは何も知りません。今までの自分を変えてみるチャンスなのかもしれませんが、残念ながらうまくいった記憶はほとんどありません。

北海道から新潟に移り数カ月経ちました。土地が違うので、外来で診る患者さんもだいぶ違うのかと思っていましたが、大学病院のためか、それほどの違いをまだ感じていません。ただ夏場の感染症はかなり違うのではと想像はしています。

言葉の違いはどうしようもないようで、带状疱疹の患者さんに「いずいですか？（北海道では「違和感がある」という意味です）」と尋ねて、周りの教室員一同含めて全く理解してもらえませんでした。

教室のシステムも当然ながら違い、こういうやり方もあるんだと自分の考えを改めることも多々あります。総回診やカンファレンスでも、疾患のとらえ方や治療方針がかなり違うこともあり、一から勉強しておしています。また新潟に大学病院は一つですので、多くの患者さんを紹介いただいています。教室員にとってはこれらの患者さんから学ばせてもらっているのも、紹介いただいた先生に感謝するとともに、その責任をしっかりと担っていかなければいけません。場所や大学が違っても教室の使命は良い皮膚科医を育てることですから、これから尽力していきたいと思っています。

新潟に来て、多くの方に出会い、多くのことを教えていただいて、大変刺激を受けています。新しい土地で自分を変えてみるチャンス、というのは実は能動的でなく受動的なことだと思い始めています。

阿部理一郎

(新潟大学医歯学総合研究科皮膚科 教授)